

<研究ノート>織田作之助と文楽

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森西, 真弓 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4532

織田作之助と文楽

森 西 真 弓

はじめに

織田作之助（一九二三～四七）は「マニア」を自称する文楽ファンだった。代表作の一つである『夫婦善哉』の主人公・維康柳吉が趣味で浄瑠璃を稽古していたことや、小説の最後の場面がその素人義太夫の大会出場であることはよく知られている。

さらには、作品そのものに小説「文楽の人」、評論「二流文楽論」などが残されている。

織田の作品には実はこれ以外にも文楽や素人浄瑠璃にまつわる描写が多い。けれども、管見の限りにおいてだが、研究の分野ではあまり注目されていなかったように思う。試みに「織田作之助」「文楽」でOZiOを検索すると木津川計氏稿「文楽を愛した織田作之助―質素に生きる芸芸員への賛歌―『上方芸能』一九三三 平成二十六年五月）がヒットするのみだ。木津川氏も本文で織田と文楽の関り

について紹介する論稿の少ないことを指摘しておられる。

他にこれまで目に触れたものとしては、織田作之助賞を主宰する大阪文学振興会の季刊誌『書斎の窓』平成十四年冬号が、高橋俊郎氏稿「織田作之助への旅 オダサクと文楽」を掲載している。

本稿は、そんな中で研究の一助ともなればと考え、織田作之助の作品中に登場する文楽関連の事項や描写を記録するものである。

（一） 概論

筆者はかつて、「作家と文楽①織田作之助」と題した短文を国立劇場（東京）文楽公演のプログラムに寄稿した（平成二十三年九月）。本題に入る前に概論として、織田の文楽への想いや時代背景を記したその文章を再録する。因みにシリーズの②は有吉佐和子、③は宇野千代を取り上げた。三人とも作品が新作文楽として上演されている。

「夫婦善哉」の作者として知られる織田作之助は、大正二年（一九一三）大阪生まれ。姉三人、妹一人の長男で、十七歳の時に母と、二十歳で父と死別、その後は長姉夫婦が親代わりだった。高津中学を経て京都の第三高等学校に入学、三高では英語の山本修二教授に影響を受けてアイルランド演劇の戯曲を読みふけり、自身も劇作家を志した。習作を発表したもの、一歳上の先輩である森本薫の才能を目の当たりにして断念、小説家に転じた。二人はそれぞれの世界で代表作を残したが、森本は昭和二十一年（一九四六）、織田は翌二十二年、肺結核のため相次いで没している。

三十三年余に凝縮された織田の短い生涯は矛盾に満ちていた。下町の庶民の家庭に生まれたが、学業優秀で名門中学の入試に合格する。その後は強い上昇志向を持ちながら、無頼の生活で健康を損ねた。東京帝国大学への進学を希望したのにも関わらず、出席日数不足で三高を退学となる。作家として世に出たが饒舌な文体を批判され、大阪をこよなく愛しつつ最後は東京で命を終えた。

織田が生まれた年、文楽では竹本摂津大掾が引退している。明治五年（一八七二）松島に開場、のち御霊に移転した文楽座を黄金時代へと導いた美声、美貌の太夫で、植村家の没落後は一座の命運を新興の松竹合名社に託すなど、紋下としての役割を果たしての勇退だった。後継には愛弟子である三世竹本越路太夫がいて、他にも名人上手を擁したが、時流という波にあらがえず、文楽は徐々に観客数を減らしていく。

大量生産大量消費社会が現出した大正時代、娯楽の分野でも大きな地図の塗り替えがあった。新派や喜劇、女優劇の台頭、映画やレコードの技術革新、ラジオの登場などが文楽の人気を侵食し始めていたのである。越路太夫と松竹もさまざまな打開策を講じたが、大正十五年には劇場が失火で全焼するという決定的な打撃を受けた。

大正年間からすであつた「文楽を守れ」の声が、本拠地喪失後はさらに高まった。地元・大阪では石割松太郎や木谷蓬吟らが執筆や講演活動を通して文楽を援護した。兵庫県出身で、当時は東京在住の三宅周太郎が、昭和三年から総合雑誌『中央公論』誌上に「文楽物語」の連載を開始する。五年には単行本『文楽の研究』としてまとめられ、続編も出て、どちらも改訂を重ね、読み継がれてきた。最近では平成十七年に岩波文庫で再刊されている。

三宅の著作は文壇から支持され、東京を中心に知識人や学生に多く読まれ、文楽の愛好者を増やしていく。鴻池幸武や武智鉄二、山口広一らの独自の活動がこれに続き、昭和十五年には映画『浪花女』のヒットもあって、文楽に復活の曙光が見え始めた。

次姉の近辺に女義太夫の豊沢仙平がいたことから、織田作之助にとっても浄瑠璃や文楽は身近な存在だった。因みにこの次姉が『夫婦善哉』の蝶子のモデルとなった女性だ。小説のラストシーンでは柳吉が素人義太夫の大会で入賞する。織田は戯曲研究の一環として触れた近松門左衛門の、台詞と地の文が融合一体となった丸本の構成にも惹かれた。大阪人として文楽の退勢は気がかりだったから、戦前の復興気運は歓迎すべきことだった。実際、三宅や鴻池の著作

に刺激されて、初代吉田栄三と吉田文五郎の評伝小説『文楽の人』を著した（出版は昭和二十一年）。また、小説『清楚』では、冒頭にさりげなく文五郎を登場させている。

これ以外にも、評論に「文楽的文学観」「文楽の味」「二流文楽論」などがある。誤解のないように断っておくと、ここで言う「二流」とは、大衆の愛する、といった意味だ。織田は文楽を大阪の町人芸術と位置付けていた。その文楽、特に豊竹古観太夫や吉田栄三が東京で一流の芸術として賞讃されている。古観や栄三の芸を自身も認めつつ、織田は三世竹本津太夫の地味だが構えを感じさせない浄瑠璃や、吉田文五郎の華麗で絢爛な舞台が好きだった。もし、それらが評価されないとしたら、大阪を否定されたようで残念だったのだ。背景には、志賀直哉に自らの小説を「きたならしい」と貶されたことへの反発があった。「二流文楽論」は平成二十一年に刊行された岩波文庫の『六白金星 可能性の文学他十一篇』に収録されている。織田がどれほど文楽に耽溺していたか。「大阪論」から引く。

芝居や活動写真やその他の興行物や催しを、めったに見ないくせに、文楽座だけは、殆んど毎月欠かさず見ている。なにかの都合で、見損ったりとすると、その月は妙に大きな損失をしたような気がして、月末から月初めにかけて、そわそわと落ちつかないくらいである。また、文楽に関する書物も、入手できる限り、購入して、どんな忙しい時でも、必ずその日のうちに眼を通して、なお再三繰りかえし読むことも、けっして珍らしく

はない。

文楽の記事が出ていると、ふだんは読まない週刊誌や女性雑誌まで買い求めて大切に保存していたという。部屋には松王丸やお園おきの首の版画を額に入れて飾っていた。本人いわく「一種の文楽マニア」だった。

有名な「可能性の文学」を書いた四日後の昭和二十一年十二月四日夜、織田は大量に咯血して、程なく東京病院に入院するが、明けて二十二年一月十日に永眠した。

織田作之助原作の『夫婦善哉』は、昭和三十一年九月、道頓堀朝日座において文楽として初演された（大西利夫脚色・野澤松之輔作曲）。国立文楽劇場開場後にも新たな脚色、作曲によって何度か再演されている。

以上がプログラムに掲載された拙稿の全文である。

（二）解題

ここからは、『織田作之助全集』（昭和四十五年 講談社 全八巻）をテキストに、織田の小説、評論、書簡、日記の文中に登場する文楽に関する記述を「解題」風にまとめていく。なお、近松門左衛門の名前は主に井原西鶴との比較で何度か登場するが、ここでは省略する。反対に建物、劇場として出てくる御霊文楽座や四ッ橋文楽座

については取り上げている。

①「雨」（全集1）

主人公・毛利豹一の母方の祖父・金助が、浄瑠璃稽古本を筆写する写本師。父で小学校教員の軽部は趣味で浄瑠璃を習っている。その上司である校長も「浄瑠璃ぐるい」。二人は広沢八助の同門で、ともに大会に出演する。

〔解説〕

以降の作品にも素人浄瑠璃を趣味とする登場人物がたびたび描かれている。近世以来、趣味として浄瑠璃を習う人は多く、素人門弟向きの秘伝書類が出版された。近代以降も大阪にとどまらず全国で浄瑠璃熱は盛んで、稽古場も多く、愛好家に向けた雑誌が数多く刊行されていた。そのため、金助のような写本師が生業として成り立っていたのである。

②「夫婦善哉」（全集1）

主人公・維康柳吉の趣味が浄瑠璃。本文には「下寺町の竹本組昇に月謝五円で弟子入りし二ツ井戸の天牛書店で稽古本の古いのを漁って、毎日ぶらりと出掛けた。商売に身をいれるといっても、客が来なければ仕様がなかった顔で、店番をするときも稽古本をひらいて、ぼそぼそする、その声がいかに情けなく、上達したと褒めるのも気が引けるくらいであった」に始まって、ラストシーン「蝶子と柳吉はやがて浄瑠璃に凝り出した。二ツ井戸天牛書店二階広間で開かれた素義大会で、柳吉は蝶子の三味線で

『太十』を語り、二等賞を貰った。景品の大きな座蒲団は蝶子が毎日使った」までの間に浄瑠璃の話題は何度も登場する。

〔解説〕

天牛書店は実在する古書店。創業者の天牛新一郎氏自身も浄瑠璃が趣味で、二ツ井戸の店舗の二階座敷を道頓堀俱樂部と名付けて貸し出していた。なにわ塾叢書『われらが古本大学』（天牛新一郎述・聞き手は肥田皓三先生 昭和六十二年 ブレーンセンター）には織田作之助の思い出も語られている。余談だが、店舗が四ツ橋にあったころ、勤務していた雑誌編集部が近かった筆者は新一郎翁から直接、本を買った経験がある。

「素義」は「素人義太夫」の略語で、「素人浄瑠璃」と同義。一般人が趣味で義太夫節（浄瑠璃）を稽古すること。

『太十』は『絵本太功記』十段目の略。主人公は武智光秀（明智光秀）。

また、全集未収録だが「続夫婦善哉」にも柳吉と蝶子の浄瑠璃趣味が綴られ、別府へ移住後も大阪から流れ着いた元文楽座の三味線弾きに稽古を受けていた様子が描かれている。先述の通り稽古人口が多かったので、大正・昭和戦前の文楽座は三味線弾きの数が太夫よりも多く、退座して稽古屋専業になる人もあった。

③「青春の逆説」（全集2）

「雨」の拡大版で、祖父、父の設定は同じ。

〔解説〕

文楽とは関係ないが、本学と関わりのあるようなエピソードを紹介する。「雨」「青春の逆説」に豹一の交際相手として登場する水原紀代子は「大軌電車沿線のS女学校生徒」と記されている。大軌電車は現在の近鉄、その沿線にあるS女学校は樟蔭高等女学校である可能性が高い。さらに、青山光二による「青春の逆説」の作品解題には「水原紀代子は実在の人物であると、中学時代に著者と同級で、のちに『海風』同人となった吉井栄治氏が証言しているのが興味深い」の記述があって、それこそ興味深い。

④「動物集」(全集2)

動物の名前をタイトルにつけた七つの掌篇のうち、「狸」に登場する老人の趣味が浄瑠璃で、「しばしば素義会に出た」とある。

⑤「天衣無縫」(全集2)

夫・軽部の姿を妻の視線から描く小説。婚約時代、四ツ橋文楽座での観劇デートに誘われるが、公演は三日前に千秋楽を迎えていた。しかも軽部は遅刻してくる。誘いの手紙に盛んに文楽ファンである旨を記しているが、文五郎と栄三を混同したような「文三」を見せたいと書いていたり、文楽を「文葉」と誤記したりしている。

〔解説〕

よく言えば天衣無縫、だが実際には軽佻浮薄と言っている軽部の人物像を表す素材として文楽が用いられている。なお、吉田文三^{ぶんぞう}という人形遣いは実在するが、昭和二年に没している。五

年に開場した四ツ橋文楽座への出演歴はない。

⑥「月照」(全集3)

幕末に実在した勤王僧・月照が近衛邸を辞す際、駕籠に付き添った僕・重助の様子を「早朝より影のように月照につきそって、休む間もなく、かけずりまわっているの、足がぶらんぶらん外れそうになって、仕方がなかった。たださえおでこの飛び出ているところへ、手も足も力なくふらついているので、文楽人形のようにであった」と表現している。

〔解説〕

「おでこの飛び出ている」容貌は、恐らく三枚目の役柄に用いられる首^{かしら}を指しているのだろう。人形の足は胴体とつながっているわけではなく、独立した足を肩板から紐で括り付けていて、足遣いが自在に動かすことができるので、写実を離れて「ぶらんぶらん」の状態に見せることも可能である。これ以外の作品にも文楽人形や演者名が比喻に用いられる例がいくつかある。

⑦「勧善懲悪」(全集3)

川那子丹造が御霊神社の前でチラシを配っている姿を、古座谷が目撃する場面で「どうせ文楽の広告ビラだろうくらいに思い」と記述。実際は菓の広告チラシを配っていた。

〔解説〕

概論にあるように、文楽座は大正十五年まで平野町の御霊神社境内にあった。

⑧「わが町」(全集3)

車夫をしている主人公の佐渡島他吉が、ある夜「御霊の文楽座へ大夫を送って帰り途」五、六人の車夫に取り囲まれて絡まれる。

他吉の孫娘の君枝が訪問した質屋の丁稚が「文楽人形のちゃん頭かしらのような顔をして格子のうしろに坐まっていた」。

久しぶりに再会した君枝と幼馴染の次郎が連れ立って歩いていると、しもた屋の二階から浄瑠璃の稽古をしている声が聞こえてくる。次郎「お君ちゃん、文楽でも見えへんか?」「文楽見たことある? 僕も見ることないけど、久しぶりに大阪へ来た序でにっぺん大阪らしい味を味おうと思て」。君枝「文楽いうたらね、蝶子はん、この頃浄瑠璃習たはるんできせ」との会話がある。

蝶子は『夫婦善哉』のヒロインその人。以下、②の『夫婦善哉』と同じ描写が随所に挿入されている。

そのあと場面が次郎と君枝のデートに戻って、文楽座の前まで来るが、文楽は東京公演中で映画が上演されていた。

〔解説〕

「わが町」は、「夫婦善哉」と並んで織田の代表作の一つに数えられる作品で、作中には下町に暮らす知人同士として「夫婦善哉」の柳吉・蝶子も登場する。

「ちゃり」とは文楽で滑稽を意味する言葉で、頭は首と同義。

⑨「大阪の指導者」(全集4)

五代友厚の評伝小説。最後に五代没後の大阪商工界を指導した七人の略歴を紹介している。その一人、土居通夫の項に「広瀬と共に浄瑠璃を旦那芸にしていた」とある。広瀬も七人の一人。土

居は鴻池家の、広瀬は住友家の「番頭」格だった。

〔解説〕

往時は政財界にも浄瑠璃を趣味とする人が多かった。「政界の黒幕」とも呼ばれた杉山茂丸(其日庵)には文楽史に残る名著『浄瑠璃素人講釈』(最新版は平成十六年の岩波文庫)がある。

⑩「清楚」(全集4)

南方から復員してきたばかりの主人公・岸上正平は、地下鉄の中で七十年配の老人に席を譲ろうとするが断られる。老人は「いや、いや、どうぞそのまま。わてはこないして立ってる方がラクでっさかい」「遠慮はせえしまへん。ほんまに、立ってる方が……」と言って若い娘の背中を、ぽんと叩いて、「あんた掛けさして貰いなはったら、どないでっか」。正平は老人らしからぬ目が覚めるような、なまめかしく美しい手の線の美しさに驚く。やがて老人は心斎橋駅で降りる。正平はどこかで見たような顔だと感じるがすぐには思い出せない。そこで、本町から乗って空席に座った老女に「いまのお年寄り、どなたですか」と尋ねる。

老女は「今の方でっか? あの方ではあら文楽の吉田文五郎はんでっしゃおまへんか」「文五郎はんはいつみせてもろても宜しおまんな」と答える。正平自身、文五郎のファンで、文楽座へも出かけていた。改めて文五郎の言動や身体付きについて納得する。戦地へ慰問に送られてきた週刊雑誌に文楽座の座談会が掲載されていて、その中であつた、仕事柄「坐るのが苦手」という文五郎の発言も思い出す。そして「ああ、文楽のある大阪へ還って来たとい

う想いが、しびれるようにあまく来た」。

その後、正平に見合い話が持ち上がるが、地下鉄で見かけた清楚な女性を思い出してしまふ。「文五郎からの聯想からか、なか文楽人形のお園のような顔立ちの娘であった」。

〔解説〕

自身が大ファンだった文五郎を作品の冒頭に取り入れて、人形遣いの生態を巧みに描き出している。『文五郎芸談』（昭和十八年 桜井書店）には「舞台に立ちづめの商売の私たちは、満員の電車で吊革にぶら下ることは苦勞ではありませんが、お客様の前でキチンと行儀よく坐っているのは苦痛であります」とある。また、三宅周太郎の『文楽の研究』（概論参照）にも文五郎は座るのが苦手だという話が出ている。よく知られた逸話だったようだ。

文五郎の座談会が掲載されていた媒体を織田は「戦地へ慰問に送られてきた週刊雑誌」と書いている。戦前に刊行されていた週刊誌には「週刊朝日」と「サンデー毎日」がある。『戦前期「週刊朝日」総目次』（黒古一夫監修 山川恭子編集・解説 平成十八年 ゆまに書房）並びに『戦前期「サンデー毎日」総目次』（同 十九年）を確認したところ、「サンデー毎日」昭和六年十月十一日号に吉田文五郎「人形は活くる」が、「週刊朝日」同八年三月二十六日号に吉田又五郎、吉田栄三「官製『文楽』は何処へ行く」、十八年一月二十四日号に「文楽六十年人形遣藝談（座談会） 河竹繁俊、吉田栄三、嘉治隆一、津村秀夫」が

見つかった。「吉田又五郎」は「吉田文五郎」の誤記かと思われる。また、座談会に文五郎は出ていない。今回、雑誌本体を調査することはできなかったが、小説の発表（大阪新聞）が昭和十七年か十八年（単行本は十八年刊行）であることから、「週刊朝日」の可能性が高く、織田が栄三を文五郎と勘違いしたのかもしれない。向後の研究を俟ちたい。

因みに大阪府立中之島図書館の「織田文庫」が「銃後の大阪」を数冊所蔵していて、昭和十六年五月発行の第三報に織田も小説「黒い顔」を寄稿している。余談だが、「銃後の大阪」は慰問が目的だから当然とも言えるのだが、落語や漫才、レビューの記事や芸能人の登場も多い、なかなか軟派な内容で、別の観点から興味深かった。

お園は『艷容女舞衣』『酒屋』のヒロイン。

⑪「異郷」（全集4）

ロシアに漂着した元禄時代の大阪商人・淡路屋伝兵衛の物語。日本の文明について皇帝に尋ねられた伝兵衛は、西鶴、芭蕉、近松、坂田藤十郎の名前を挙げた他、金春の能狂言について説明している。

伝兵衛の妻の名前を「お俊」にしている。

〔解説〕

著者自身の「あとがき」に「空想より出たロマン」とある。題材にしたのは雑誌『上方』九十号に掲載された「ロシアに於ける最初の日本人」（西谷雅義）で、伝兵衛が実在したことは確

からしい。

妻の名を「お俊」としたのは織田の創作で、『近頃河原の達引』のお俊伝兵衛に拠っていると思われる。

⑫ 「蜩」(全集5)

坂本龍馬で有名になった伏見の船宿・寺田屋の女将・お登勢が主人公。夫の伊助が浄瑠璃の稽古を始める。吃音だったが下手ではなかった。「習いはじめて一年目には土地の天狗番付に針の先で書いたような字で名前が出た。お登勢が女兒を産むと「お染」と名付ける。その後、寺田屋の二階座敷は素義会の会場になる。

〔解説〕

「天狗」は鼻が高い、すなわち自惚れから転じて 素人の中の上手を指す。

寺田屋にはすでに養女の「お光」がいて、『新版歌祭文』『野崎村』に登場する二人の若い女性の名前に合わせるため、「お染」と名付けた。

⑬ 「見世物」(全集5)

元禄六年の冬、敦賀国金子村の農民・久助が大阪見物にやってきて、「道頓堀で人形芝居を見た」。

〔解説〕

演目、出演者などの記載はないが、『義太夫年表 近世篇』で確認すると、おそらく竹本座で竹本義太夫を聴いていることになる。

⑭ 「神経」(全集5)

発声法の型に触れる中で、「新派には新派の型があり、義太夫には義大夫の型、女剣劇や映画俳優の実演にも型があり、浪花節なども近頃は浪花節専門の声色屋が出来ている」と表現している。

〔解説〕

声色屋は声帯模写の芸人。

⑮ 「世相」(全集5)

主人公が「ダイス」のマダムと四ツ橋にある天文館(大阪市立電気科学館 昭和十二年開館)のプラネタリウム見物に行き、その帰途に文楽座の前で立ち止まる。

主人公を訪ねてきた小学校時代の友人・横堀千吉の顔が「右の眼尻がひどく下った文楽のツメ人形のよう」と描写されている。

「横堀はただ私の感受性を借りたくぐつとなつて世相の舞台を放浪するのだ」との記述がある。

〔解説〕

電気科学館と文楽座は同じ四ツ橋にあった。

「ツメ人形」は一人遣いで、端役を演じる。さまざまな表情をした人形がある。

「くぐつ」は漢字で「傀儡」。人形のことである。

⑯ 「それでも私は行く」(全集6)

主要な登場人物である千枝子(姉)と弓子(妹)の会話。「南座には『文楽』が掛っていた。『文楽の女って、皆哀しい女ばかりだけど、姉さんも哀しい女になってしまったのね』とある。

〔解説〕

この時、南座で上演されていたのは、昭和二十一年三月三十一日初日で四月十四日まで行われた「文楽座人形浄瑠璃引越興行」と思われる。詳細は『義太夫年表 昭和篇 第三卷』参照。弓子の言う「哀しい女」とは、この興行で上演されていた『近頃河原の達引』のお俊、『艶容女舞衣』のお園を指すと考えられる。なお、斎藤理生氏著『小説家、織田作之助』（令和二年大阪大学出版会）によると、小説が掲載されていた京都日日新聞の創作欄の下に、その興行の広告が出ているとのことだ。

⑰「文楽の人」（全集7）

「吉田栄三」と「吉田文五郎」の二編。前者は評伝、後者は芸談聞書の様式をとっている。

昭和二十一年六月に出た単行本の「あとがき」を引く。全集には未収録である。（現行の漢字・仮名遣いに改める）

「文楽の人」は吉田栄三、吉田文五郎の二人の人形使いを書いたものだが、この人達を書くことは即ち文楽の人達や文楽の歴史をも書くことになるわけで、題名を「文楽の人」とした所以である。

国宝という言葉も今日では大分値打ちが下って来たようだが、しかし敢て使えば、たしかに栄三、文五郎は国宝級の人形使いだ。ところが、この二人については従来伝記というものが殆んどない。わずかに鴻池幸武編「吉田栄三自伝」と桜井書店の「吉田文五郎」の二著があるのみだが、いずれも絶

版で、今日では容易に入手がたい。

伝記がないばかりか、誰もこの二人を小説に書こうとしなかった。だから僕が書いたというわけだが、脱稿した原稿を出版屋へ渡して間もなく、栄三は死んでしまった。

この書が出来ればまず栄三に献じようと思っていただけに、痛惜極まりない。わずかに文五郎とそして古靱太夫の長寿を祈るばかりである。この二人がいなくなれば、もう文楽はだめだ。今月の文楽は落月ツキノフの最後の明りの文楽である。

最近来朝したソ連ソ連のシモノーフ氏は、文楽の不入りを見て、このような優れた芸術がかくも冷淡に扱われているのは解せぬと慨嘆していたが、僕も同感である。

いつの世にも芸術の道は渝ユらない。浮足立った昨今の人心に文楽の人達の血のにじむような修業振りを知らせたいと思う。（昭和二十一年四月二十四日記）

〔解説〕

『吉田栄三自伝』は、昭和十三年十一月に相模書房から刊行され、戦後の二十三年十二月に和敬書店から再刊されている。

『文五郎芸談』は⑩参照。

この小説は右記、栄三の自伝と文五郎の芸談から多くを撰取して書かれている。織田の創作方法の特色として先行作品の換骨奪胎があることは夙に指摘されているが、これもその一つ。なお、公刊はされていないが、関西大学図書館蔵「氷見克也コ

レクシヨン」の中の「吉田文五郎師座談会速記」が『大阪都市遺産研究』三号（平成二十五年三月）に翻刻紹介されWEB上で読むことができる。

文五郎を小説化した作品には後年の昭和四十五年九月刊の梁雅子著『文五郎一代』（朝日新聞社）がある。

栄三は終戦の年の十二月に栄養不良も一因となって七十三歳で亡くなった。鴻池幸武も同年に出征先のフィリピンで戦死、享年三十一。豪商・鴻池男爵家の御曹司。因みに古鞆太夫からの書簡の宛名は「若旦那様」。文五郎は昭和三十七年に九十三歳で長逝。晩年まで舞台に立った。三十一年には旧宮家の東久邇家から「難波掾」の号を贈られている。古鞆太夫も長命で、昭和二十一年に秩父宮家から「山城少掾」の掾号を受け、三十四年に現役引退、四十二年に八十九歳で没した。

織田生誕百年の年（平成二十五年）に出た『織田作之助の大阪』（オダサク倶楽部編 平凡社）で、豊竹英太夫（現呂太夫）が『夫婦善哉』と文楽の芸の中に「文楽の人」を読んだ感想を語っている。

⑬ 「怖るべき女」（全集7）

舞台は別府。主人公である京子の祖母が浄瑠璃を習っている。師匠（竹さん）は元文楽座の三味線弾きだったが、女性問題が原因で破門され、女と共に別府へ流れ着いて間借りしながら浄瑠璃を教えていた。別府は大分や福岡と並んで浄瑠璃が盛んだったが、芸人が少なかったの、竹さんの弟子は多かった。竹さんの妻は

嫉妬深く、苦み走った色男の竹さんはもてたのでよくヒステリーを起こす。そんな時、竹さんが逃げ込んだのが京子の祖母の家で、結局、祖母と十五歳年下の竹さんは男女の関係になってしまう。

〔解説〕

タイトルになっている「怖るべき女」とは美貌で奔放な京子のことで、祖母の話は脇筋に当たる。

⑭ 「二流文楽論」（全集8）

概論を参照されたい。

⑮ 「小説の思想」（全集8 「断片」）

小説の思想と小説の中の思想は異なる、ということを論証するため、人形芝居の中に思想はないが、人形芝居の思想があると主張している。織田にとって重要なのは「小説の思想」だと言う。

⑯ 「文楽的文学観」（全集8 「断片」）

「小説の思想」と同じ主張だが、タイトル通り文楽についての記述がより多い。栄三と文五郎が朝日文化賞を受賞したのを機に文楽が注目され、文楽座がにわかに大入りになったことについて批判的に触れている。文楽の思想については具体的に次のような例を引いて述べている。「花柳章太郎が栄三に自分の芝居を見て貰って批評を頼むと、栄三は『わがことが分らんでいて、他人様のことが言えたもんかいな』と言ったそうである。六十年苦勞して、いまだに『わが事』がわからないという。思うに人形の思想というものは、こういうものなのだ。」

〔解説〕

花柳章太郎は新派俳優。主に女方、中年以降は立役としても活躍した。人間国宝。芸術院会員。文化功労者。映画でヒットした『浪花女』が昭和十六年に舞台化され、お千賀を演じることになった花柳が、元三世竹本津太夫の弟子であった同じく新派俳優の伊志井寛（太夫時代の芸名は津駒太夫）の伝手で津太夫や文五郎などの知遇を得（花柳『あさき暮』昭和十八年 武蔵書房）て、すっかり文楽ファンになり、中でも栄三の芸に憧れるようになった。文楽の東上公演時には会食を共にしている（花柳『狐のかんざし』平成二十年 三月書房）。「わがことが分らなくて」「云々の発言は、三宅周太郎著『俳優対談記』（昭和十七年 東宝書店）所載の三宅と花柳との対談に拠っている。栄三側も花柳の来訪はまんざらでもなかったようで、三宅の『文楽の研究』に「この思わぬ聞入者は栄三にはかえって嬉しかったらしい。よくその噂をしてにやにやしていたからだ」とある。花柳の師である喜多村緑郎の著書『わが芸談』（昭和二十七年 和敬書店）にも「彼れ（花柳）は近年文楽の人形に興味を感じて、名手栄三氏に私淑しているという」とある。なお、凝り性の花柳は、淡路人形浄瑠璃にも興味を持って、現地へ取材に向いている。昭和十七年二月に東京劇場で川口松太郎作、久保田万太郎演出の『淡路人形』が上演された際には、女人形役者・市村志津役で遣う八重垣姫の指導を栄三に受けた（前掲『狐のかんざし』）。

② 「文楽の味」（全集8「断片」）

満員の文楽座二階で立見をした経験が綴られている。②同様に急に文楽に観客が来るようになって、織田は不入りだったころのことを「落日の最後の明りの美しさを見ていたのである」と記す。古軼太夫や栄三の芸の素晴らしさに触れながら、やはり自分は三世津太夫や文五郎が好みであることをここでも繰り返している。筑摩書房から出た写真集『文楽』や映画『浪花女』を批判。前者は演者の芸談掲載を評価する傍ら、外国人の文楽論を載せていることに疑問を呈している。織田は大阪人の文楽に寄せる素直な感想の方に価値を認めているのである。

〔解説〕

織田が見たのは昭和十七年十月の文楽座。古軼太夫が『傾城阿波の鳴戸』の切りを語った。人形は栄三の阿波の十郎兵衛、文五郎の女房お弓。

津太夫と文五郎が好きだったことについては概論を参照。

③ 「雷の記」（全集8「断片」）

②と同じく写真集『文楽』の批評。さらには文楽を扱った小説についても「いずれも浅薄」と切って捨てている。

〔解説〕

文楽に世間の関心が集まっていることは織田にとっても喜ばしいことに違いなかったのだろうが、文楽は取り澄ましたものではなく、庶民の娯楽であって、その本当の良さが正しく理解されていないという想いが一連の文章を書かせたのであろう。

批判された小説は長谷川幸延の「古軼太夫殺し」「御霊文楽座」。

この古靱太夫は初代で、実際に明治十一年、大道具の棟梁に殺害されている。

②④「東京文壇に与う」(全集8「断片」)

織田が東京から大阪へ帰った時の心情を「お園のように『去年の秋のわづらひに、いつそ死んでしまつたなら』などと、女らしくならず、いそいそと新しい大阪という夫のふところに抱かれた。既に、私は文五郎のあやつる三勝半七のサワリを見ていたのである」と表現している。

〔解説〕

お園、三勝、半七はいずれも『艶容女舞衣』『酒屋』の登場人物。「去年の秋のー」は処女妻お園のクドキの部分。「クドキ」とはヒロインが本心を吐露する場面のことである。「サワリ」は「クドキ」と同義。

②⑤「わが文学修業」(全集8「断片」)

「文楽で科白が地の文に融け合う美しさに陶然としていたので会話をなるべく地の文の中に入れて、全体のスタイルを語り物の形式に近づけた」。

〔解説〕

概論参照。織田独特の文体はここから生まれた。

②⑥「文学的饒舌」(全集8「断片」)

徳田秋声作『縮図』評に「吉田栄三の芸を思わせる渋い筆致」

との表現。

〔解説〕

渋いことを表すのに栄三の芸風を引いた。

②⑦「大阪発見」(全集8)

二十三歳の時、織田は当時交際していた少女・Kと「月ヶ瀬」というしるこ屋へ行った。Kはあん蜜、織田はぶぶ漬を注文する。出てきたぶぶ漬のお櫃は「文楽の人形芝居で使うような可愛らしいお櫃である」。「文楽芝居のようなお櫃に何となく大阪を感じる」。織田は東京にいる頃、よく法善寺横丁の「めをとぜんざい屋」を想い出したとして、店の外観や店内の様子を記している。「明治初年に文楽の三味線引きが本職だけでは生計が立たず、ぜんざい屋を経営して」云々とある。

また、戎橋そごう横の「しる市」(白味噌の汁を出す店)で食事をした後、「戎橋を横切り、御堂筋を超えて四ツ橋の文楽座へ向いた」と書き、芸人たちの血の滲むような修業ぶりや、一途に芸道を歩む姿を想うと「ああここに大阪があると私は思うのである」と記している。

〔解説〕

食べるのが好きな織田らしく、さまざまな大阪のB級グルメが紹介されている。お櫃が小ぶりなのを見て、文楽の小道具を想起するところが文楽ファンたる所以。

現在の「夫婦善哉」の公式サイトでは、前身の「お福」の創業者について、明治十六年、「文楽の太夫、竹本琴太夫こと『木文字(きもんじ)重兵衛』という人がはじめた」と紹介されている。ただし、『義太夫年表 明治篇』の人名索引にはこの芸

名は見当たらない。

㊤「大阪論」（全集 8）

前半はすべて文楽の話題で埋められている。一部を概論で紹介している。織田の文章でお馴染みの津太夫、文五郎、栄三、の他、金一封として五十円を貰って喜んだという吉田冠四の浮世離れした逸話などが語られる。

中盤は話題が文学に移る。川端康成の「浅草紅団」に見られる尻取り式会話に触れた後、「川端氏が大阪出身の作家であるということでは、べつに私は川端氏の文学と、文楽との関係を他日深く考えてみたいと思っている」。また宇野浩一について、「水すまし」を挙げ、「宇野氏の芸がいよいよ栄三式に洩く枯れて来た」と表現、ここでも栄三の名を比喩的に使っている。さらに武田麟太郎の作風について、奔放だが、がさつでなく、自己の芸術を計算しながら、しかも計算のあとを見せない、と評したあとに「文楽をうんだ大阪に、乱雑な芸術は生れないともいうべきだろう」と記している。

大阪の性格を「勁い、逞しい、激しいリズム」と表現し、大阪人は、芸の細かさ、話術の巧みさ、精神の強さをもっていると言語。それらは文学、演劇、落語にも共通すると説き、「文楽の太夫の声や太の三味線の音を見聴きたものは、必ずやそのポテツとした厚みのある、奥行の深い、ネチネチした味の中に、大阪のもつ逞しい現実謳歌のリズムを感じると思う」と続けている。その後、日本の小説には語り物の伝統が根強いことに触れ、「話

術の優れた小説には、多少とも講談、浄瑠璃や落語の話術が、極めて巧みにそれと気がつかないくらいにこっそりと取り入れられている」と持論を展開している。

後半はお金の話題。大阪落語「鴻池の犬」で大阪人の現世主義に触れた後、「浄瑠璃の有名な文句に『金ゆえ大事な忠兵衛さん』というのがあり、いわばこれは梅川のロマンチズムをうたった名句なのだが、ロマンチズムをうたうのにも、わざわざ金をもって来る。（略）しかし、私は、ここでも文楽の人達を想起しながら、ほんとうに大阪人は、そんなに金にいやしいかどうかと、疑ってみたいのである」と続ける。そして清貧な生き方を貫いた文楽の芸人たちを賛美する文章へとつながっていく。摂津大掾が七十歳になっても引退せず「なお至難の道に精進しようとするこの努力は、無償の行為でなくてはならぬであろう」と続けている。そして、中村鴈治郎や坂田三吉も文楽の人達同様、物欲とは無縁だったという話で締めくくられる。

〔解説〕

織田の大阪愛が横溢した文章。吉田冠四は明治・大正期の人形遣い。文楽の人形は三人遣いで、足遣いとして修業を始め、左遣いから主遣いへと段階を経て栄進していくが、冠四は生涯、足遣いのままで終わった。栄三は自伝の中の鴻池との対談で「中々上手でした」と語っている。いわば「足遣いの名人」的存在。その他、ここで綴られている文楽人のエピソードは、多くが三宅周太郎の正統『文楽の研究』に拠っている。

摂津大掾は概論にも名前が出ているが、初名「世竹本越路太夫、後に六世春太夫。小松宮家から「摂津大掾」の掾号を受領した。

「太の三味線」は文楽で用いられる太樟三味線のこと。

「金ゆえ大事な（の）忠兵衛さん」は『冥途の飛脚』のヒロイン梅川のクドキで、自分のために公金を横領してしまった忠兵衛の身の上を案じる台詞。

㉘ 「大阪・大阪」（全集8「断片」）

毎年、夏は文楽座が地方巡業に出る話を述べている。七十歳を過ぎている栄三や文五郎が盛夏の下で旅の暮らしをし、しかも三日目ごとくらいで上演演目を替えていく苦勞を察している。

㉙ 「大阪の詩情」（全集8「断片」）

電気科学館へ行く道を綴る中で、四ツ橋の「南側に明治大正の詩情の象徴である文楽座の櫓を見ながら」と描写。

〔解説〕

昭和五年に開場した四ツ橋文楽座は、明治五年、佐野屋橋に建築された近松座を移築したもの。

㉚ 「大阪・大阪」（全集8「断片」）

上方文化の多種多様を紹介する。万葉集、源氏物語、古今、新古今、近松、西鶴、芭蕉、大和猿蓑、坂田藤十郎、法隆寺、と並べる中にもちろん「人形芝居」がある。そして「人形芝居を除くいかなる上方文化もこの土地には見られなくなった」と嘆いている。

㉛ 「お座敷芝居」（全集8「断片」）

素人が厚生を目的に座敷で演じる「お座敷芝居」の話題。冒頭に文楽座や乙女文楽を挙げている。

〔解説〕

乙女文楽は女性が一人で演じる人形芝居で、当時は新世界のラジウム温泉で行われていた。現在も複数の演者が活動している。

㉜ 「大阪の顔」（全集8「断片」）

東京から来た人を案内するにふさわしい場所として法善寺を挙げる前提として「文楽は東京の人にも知っている」と記す。

㉝ 「起ち上る大阪」（全集8「断片」）

昭和二十年三月の空襲で被災した人たちが復興を目指す姿を描く中で、織田が新聞に「復活する文楽」という記事を見つけ、希望を見出す話。

〔解説〕

文楽座もこの時の空襲で罹災。文楽を経営する松竹の白井松次郎社長の自宅、古鞆太夫収集の貴重な文献類、人形の首や衣裳類の消失、などの大きな被害を被った。

㉞ 「大阪」（全集8「断片」）

織田が自分のことを語る中で「文楽と鴈治郎と大阪落語だけを愛しているような顔をして、まるで中年の男のように思われている」と表現。

㉟ 「永遠の新人」（全集8「断片」）

空襲で大きな被害を受けた文楽が七月から朝日会館で公演を再開したことを紹介している。

〔解説〕

上演に必要な人形の首や衣裳類は好劇家からそのコレクションを譲られた。

③⑦ 「電信棒の電燈」(全集8「雑稿」)

いつも大阪のことばかり書いている、それでは芸がない、「これに、文楽、西鶴、近松、大阪弁」と並べている。

③⑧ 「関西文化の将来」(全集8「雑稿」)

西鶴の二百五十年忌が軽んじられたのに比べ、近松は忘れられることがないと述べ、「その伝統をひく文楽の近頃は、あやしい許りに繁昌し、文楽に関する書物の氾濫は玉造の早替りのように眼まぐるしい」と綴っている。「文楽についていえば、やがて消えようとする火の最後の燃焼をかき起すために、回顧的な団扇で煽った挙句の煙ではあるまいか」と懐疑的な意見を述べている。

〔解説〕

織田は何度も西鶴二百五十年忌がほとんど盛り上がりを見せなかったことを書いている。それに比べてにわかを訪れた文楽ブームについて触れている。この文章が書かれたのは昭和十八年で、概論にあるように数多くの文楽関連の著書が出て、文楽に注目が集まった時期だった。しかし、織田が危惧した通り、この後、文楽は戦争の激化や戦後の二派分裂などで再び厳しい道を歩むことになる。なお、全集には年次は記されていない。『織田作之助文藝事典』(浦西和彦編 和泉書院 平成四年)を参照した。

玉造は明治に活躍した人形遣いで初代吉田玉造。『浪花女』からの関連で、『義経千本桜』の狐忠信を連想したものか。

③⑨ 「京阪食道楽失格」(全集8「雑稿」)

霧立のぼるに鰻をご馳走になった話。「文楽の芝居に出てくるような小さな井鉢の底の方へふわりと盛った鰻まむしを食べながら、霧立さんには失礼ながら、出雲屋の二十五銭の鰻まむしをしきりになつかしんだ」。

〔解説〕

霧立のぼるは宝塚少女歌劇出身の女優で、後に新派に入団した。

④⑩ 「杉山平一宛書簡」(全集8)

昭和十五年十月二日付「『浪花女』は人物が掴めていないと思いがち、たのしかった。三宅周太郎の『文楽の研究』ほどでもないが」。

昭和十五年十一月二十六日付「文楽はだんだん分らなくなってきた。てんで興味が無いのかも知れない。つまり無気力のせい、か、たぶん風邪のせいだろう」。

昭和二十一年四月六日付「吉田文五郎は愚作」。

④⑪ 「青山光二宛書簡」(全集8)

昭和二十年十月十二日付「『吉田栄三』の書下し原稿があるだけ、しかしこの原稿はあまり自信がない」。

〔解説〕

④⑩ともに『文楽の人』の出来には自信がなかったようだ。

④⑫ 「川島雄三宛書簡」(全集8)

昭和二十一年三月八日付「笹田和子とは世をしのぶ仮の名、実はお俊と申し、小生ますます痩せおとろえて、今はセンベイの如く打ちひしがれ、やがて、『お俊(シュン)センベイ(伝兵衛)』と後世まで浮名を残す悲境が見られるでしょう」。

〔解説〕

笹田和子との再婚がうまくいかなかったことは知られるところ。自らを「センベイ」と洒落のめして卑下、自嘲している。

なお、大阪市史編纂所刊『大阪の歴史』八十号の「特集『生誕百年』織田作之助」(平成二十五年七月)で、大阪府立中之島図書館「織田文庫」が所蔵する昭和二十一年の織田あての書簡が翻刻されている(小笠原弘之「『織田文庫』書簡に見る昭和二十一年の織田作之助」)。その12(十返一発信)に『文楽の人』刊行に関連するやり取りが紹介されている。

(三) 附記

織田自身のものではないが、次姉・山市千代が全集6の「月報」に寄稿した文章は、素人淨瑠璃全盛期の様子や、織田との姉弟愛がよく伝わる内容なので、後半部分をここに引用する。

弟が別府に来ますと、主人がよくつれてお茶屋に遊びに行きました。弟はのめないのにここにこ笑って付合っていました。

流川二十目にビリケンというダンスホールがあつてよく行きました。私が義太夫の稽古に主人と行くときは弟もついて来て、きいていました。弟も文楽が好きだったようで、あとで「文楽の人」という本を出し、私のところへ送ってくれました。

私は京都や大阪に素人審査大会があると出かけて行くのですが、弟はいつも応援に来てくれて、京都で婦人の最高点をとったときなどは、京都の料理屋へ私の後援者十四、五人を弟が招待して、みなさんをもてなしてくれました。また島原の演舞場で河庄を語って舞台をおりてくると、弟がとんで来て「ちっちゃいね、よかった」と喜んでくれた顔がいまでも目に浮かびます。大阪の北の新地演舞場で新口村を語って入賞し、たくさん賞品を頂いたときは、弟がその賞品をだいて喜んでくれました。

昭和二十一年十月五日に京都の浄るり大会に出場してそのとき忙しい時間をさいて待っていてくれたのが、弟とのさいごになりました。東京の入院中に、バナナを送ってほしいと手紙が来ましたが、バナナが全然ないときなので、外の品物とお召のたんぜんと下着、十二文の足袋、毛布を送りました。それをさいごまで着てなくなりました。私のことをこまかく見ていたものだ、私のモデルの「夫婦善哉」をよんで、弟のことをなつかしんでおります。

「ちっちゃいね」は、年齢が小さいほうのお姉ちゃん、の意である。「河庄」「新口村」はいずれも近松門左衛門原作。

むすび

以上、講談社版の『織田作之助全集』に収録された作品の中に登場する文楽や素人浄瑠璃関連の文章、描写を紹介した。この全集に収録されていない作品については未確認だが、これだけでもかなりの数に上った。

織田の愛読者は多く、研究も進んでいる。筆者には本格的な織田作之助論を書く能力はないが、同好者として、ぜひ織田の文楽への傾倒ぶりを知ってほしく、これをまとめた。